

(様式6)

企画提案書（企画力の評価）

本紙のコンセプト及び過去紙面を飾ったコンテンツの文脈を踏まえつつ、本紙をさらに魅力的にする新たなコンテンツ（新規企画）を提案してください

■これまででない企画 表紙

◎「麻布の未来を大予想 — 漢字一文字で書いてみる」

漢字一文字という制限は、多くを語らずとも読む人それぞれの解釈を生み想像の余白を広げる。答えを一つに定めないからこそ、多様な未来像が並び立ち、麻布の懐の深さが浮かび上がる。



全体写真を使用し麻布という街が世代や立場を越えた“集合体”であることを、視覚的に一瞬で伝える。

麻布地区の未来は、誰か一人が描くものではなく、ここで暮らし、働き、行き交う人々の思いが重なり合って形づくられていく。本企画では、とある商店街に集う老若男女が一堂に会し、それぞれが「麻布の未来」を思い浮かべ、漢字一文字で表現する。

8 団体ある麻布地区の商店街に協力してもらいシリーズ化する。タイトルのカラーリングは発行号（年3回発行）の季節に合わせる。

◎ひとつの麻布、ふたつの情景

昼の公園は、光に満ち、街の動線や人々の営みを受け止める開かれた場所。夜の公園は、照明によって輪郭が際立ち、静けさや安心感・緊張感といった内面的な印象を強く残す。



二つの情景を対比させることにより、訪れる人の立場や気持ちによって変化することを表現。二分割のレイアウトは、ひとつの正解を示すのではなく、視点が複数存在すること自体を肯定する構造である。

同じ場所であっても、見る時間や立つ視点が変われば、風景の意味は大きく変わる。麻布台ヒルズ中央公園を昼と夜、2枚の写真で並べて紹介する本企画は、「視点によってものごとは変わる」という街の本質を可視化する試みである。

配布時に二つ折りになることを意識したデザイン。発行号ごとに取り上げるテーマを替え「右から見る、左から見るビル」「下から見上げた風景、ビルの屋上からのぞき込む風景」「晴れと雨」などを予定している。

■これまでにない企画 中面

◎「定点日記 — 変わり続ける麻布を、同じ場所から見つめる」

麻布の中のひとつの場所やモノを1年間、同じ視点から見守り、記録し続ける試み。今回は公園の桜を題材とし、季節とともに呼吸する街の時間を可視化する。

定点観測という手法は、変わらない視点を保つからこそ変化が際立つ。

訪れる人の記憶や感情とも重なり、読み手の「去年の今頃」を呼び起こす装置となる。街角の街路樹、神社の手水舎、工事中の風景など、題材を変えることで「自然」「暮らし」「街の更新」といった多様なテーマへと展開が可能。1年という長さは、街と向き合う編集姿勢そのものを表し、ザ・AZABUが地域とともに歩んできた時間とも重なる。変わりゆく麻布を、変わらない視点で見つめ続ける。



◎Azabu 美jou

既存のコーナー「アートに魅せられて」では取り上げきれない、看板、公園の遊具、街灯、マンホール、店先の装飾など、名もなき存在に宿る美しさや愛らしさに光を当てる企画である。

芸術として評価される前段階の「いいな」「かわいいな」という感覚

を大切にすることで、街との距離は縮まる。正解や解説を押しつけず、読者自身の感性に委ねる点が、本企画の大きな特徴だ。

普段は見過ごしてしまう風景も、視点を少し変えるだけで、特別な一瞬になる。本企画は、麻布を歩く楽しさを再発見する入り口であり、街の魅力を“知識”ではなく“感情”で伝えるコーナーであることを目指す。



■既存のバリエーション企画 中面

◎「大使を訪ねて」のバリエーション「大使の一週間 ～麻布から世界へ、仕事の現場～」

「ザ・AZABU」定番人気企画「大使を訪ねて」は、人となりや国の文化に光を当ててきた。本企画は、その別バージョンとして、大使の“仕事”そのものに焦点を当てる。人物紹介や親しみやすさに加え、外交官としての役割や日々の業務を、1週間という時間軸で具体的に描くことで、外交をより身近な営みとして伝えることを目的とする。

一週間のスケジュールを追う構成は、大使の仕事が特別な儀礼だけでなく、会議、視察、意見交換、地域との交流など、積み重ねによって成り立っていることを可視化する。曜日ごとに異なる役割や緊張感を切り取ることで、外交の現場に流れるリズムや責任の重さが自然と浮かび上がる。

大使館へのアポイントが簡単ではない中、何度も同じ大使に登場していただいても違和感のない企画。華やかなイメージの裏側にある地道な調整や対話を丁寧に紹介することで、読者は大使館を「遠い存在」ではなく、地域と関わりながら働くプロフェッショナルの場として捉え直すことができる。「大使を訪ねて」を補完し、麻布の国際性をより立体的に伝える企画である。

